退官教授のご挨拶

定年退職によせて －ノミ（飲み）ニケーションの効用－

琉球大学名誉教授（前顎顔面口腔機能再建学講座 教授） 砂 川 元

昭和60年４月、札幌医科大学（札医大）助手から琉球大学医学部（琉大）に助教授として赴任した。札医大には８年間助手として勤務したが、臨床・研究が主で、医学科学生教育と学生指導には全く縁がなかった。しかし、琉大赴任後は、すぐに「歯科口腔外科学」の講義や学生の指導教員を割り振られていた。

当時の指導教員は、Ｍ１からＭ３までは基礎の先生、Ｍ４からＭ６までを臨床の先生が20名の学生を担当していた。私の担当は、２期生に当たるＭ４学生で、20名全員が男子学生のグループと３年間お付き合いした。琉大赴任当時の私は37歳と若く、指導教員が何をするのかも定かではない上、学生も二十代前半の若者であることから懇談会と称して深夜まで飲み歩いたことを覚えている。皆、無礼講であった、時には他のグループの学生が合流することも多く、常に盛り上がっていた。お陰で学生とのコミュニケーションも良好で、全員が留年することもなく、優秀な学生達であった。本来の指導教員制度は、学生生活や履修に関する指導・助言の場であり、グループによっては、「がじゅまる会館」でソフトドリンクを飲みながら指導教員の話を伺っていたことを後に知ったが、夜の懇談会でも十分にその役割は果たしていたと思われるし、同様のやり方で５期生、８期生と続けてきた。間違いなく学生は成長していたように思うし、現在も多くの方面（部署）で活躍している報に接すると我が子のことのように嬉しいものである。

平成７年３月、教授に昇任したが、その後、平山清武教授（小児科教授）から「医学部準硬式野球部顧問」を依頼された。私は学生時代、体育会系部活（硬式庭球部）には中途半端に所属していただけで、主に学生会活動をしていたし、その後も部活顧問などの経験はなかった。しかし、医学部における学生生活の中で、将来医師になる過程での部活は、良き医師を涵養するという観点から大切だとも考えていたので、平成10年から平山教授の後任として野球部の顧問を引き受けた。

それから15年間、野球部の顧問を務めたが、野球部の学生は総じて純真で礼儀正しい連中であった。学内では、度々私の教室を訪ねてくるが、私だけではなく、教室員や職員にもきちんと挨拶が出来ることから、皆野球部の学生を可愛がっていた。人間の最初の付き合いは挨拶から始まるし、医師になったらまず、患者との挨拶から診察がスタートする訳である。挨拶が出来ない学生に対しては、年に数回ある「飲み会（新人歓迎会、忘年会、留送会など）」で飲みながらやんわり教育すると効果覿面であった。特に部活は、年齢の違う先輩・後輩あるいは同輩と付き合うことからまず挨拶が出来ることは、大変重要であると考えているので、礼儀作法を主体に学生と付き合ってきた気がする。

このように、医師としての養成には、講義室での専門教育のみならず、学生との裸の付き合いも効果的であると考えている。講義室で質問も出来なかった学生が、飲み会の席になるとコミュニケーションが良くなり、驚くと同時に有意義なことが多いと感じたものである。基礎・臨床の専門科目の教育のみならず人間形成には部活が重要であると前述したが、野球部顧問を通して実感した。さらには、これら学生との飲みニケーションを通して私自身も多くの活力をもらい、職責を果たせた原動力になっていたとも思っている。

また野球部には、多くのＯＢや学生が県内外から集まって私の退職記念会を開催して頂いた。このように、肌で付き合った学生とは現在でも良好な関係が続いており、私の貴重な財産になっている。